

## 13 あきらめず権利としての 社会保障の実現へ

佐藤 道子（社会福祉法人あゆみ会理事長）



### 戦後の混乱期の経験から福祉の道へ……………◆

医療や看護業務活動を中心にしながら、介護、保育にかかわって、おおよそ六〇年になります。考えてみれば終戦後、満州から両親とともに引き揚げてきた私は、物心ついたときからずーっと妹たちの面倒をみてきました。両親は朝から晩まで働きづめで、私が妹たちをおんぶし、手を引いて遊びに連れて歩きました。小学校がはじまれば、教室に連れていくことも度々ありました。敗戦直後は三度の食事にもたいへんで、わが家も明日の米もないなか、ひもじい毎日だったことも思い出します。こうした貧しい暮らしと社会の混乱期の経験が、福祉の道へ向かわせたのかとあらためて思い返しています。

### ◆ 看護師の仕事と保育運動……………◆

仙台の看護学校でセツルメントに参加し、宮城野原の健康相談会で乳銀杏保育園ちらいちやうの阿部和子先生と出会い、保育のボランティアに誘われました。運動会やクリスマス会などに参加しながら、いろいろ教えていただきました。

一九六二年、新米看護師として宮城厚生協会坂病院（現在は坂総合病院）に就職。当時塩釜しほりには預けられる保育園がなく、最寄の下馬駅げまから電車で仙台市にある乳銀杏保育園まで連れて行き働いていました。

私は看護師として働きながら、労働組合のみなさんと一緒に働く母親のため「産休明けから預かる保育所を！」と運動し、院内に無認可保育所が開設されまし

た。まもなく地域の方々からも強い要望が出され、院内から地域に開かれた下馬乳児共同保育所（無認可）となりました。

そのころから看護師としての責任を果たす一方、保育士さんの確保や父母の会の組織・運営、自治体への要求運動などのとりくみに明け暮れていました。「母親は家庭に帰れ」という自民党のキャンペーンに反論するためにも、阿部和子先生をお呼びして何回も学習会をもちました。乳児期・幼児期それぞれの成長過程で、家庭だけでは及ばないたくさんのことを学び、集団保育で成長するすばらしさが母親たちの確信になりました。

こうして、「ポストの数ほど保育所を」と全国的なたたかいかにも大勢の父母が参加し、運動が広がりました。地域の協力と、なによりも保育士・父母のみなさんの努力で、一九八〇年、下馬乳児共同保育所は社会福祉法人あゆみ会あゆみ保育園として認可されました。

介護保険制度開始と同時に、訪問看護ステーションを立ち上げました。また、ヘルパー養成講座を実施し訪問ヘルパーステーションも開設しました。私が定年退職後数年して、あゆみ会の理事長になり、保育所の増設、通所介護やサービス付き高齢者住宅の開設など、地域の要求に応えながら、児童や高齢者の人権をまもるために法人としての役割を追求しています。

### ◆ 現場から運動の輪を広げていく……………◆

働く母親にとって保育園は、子どもを安心して預けられる場所であり、子育てのよるこびや悩みなどを共有し合える場所でもあり、意識する・しないにかかわらず自身の成長につながる場所ではないかと思えます。保育園の主役はなんといいても子どもたち。キラキラ輝く瞳でなんでも思いっきりをたくさん体験してほしい。人間としてのやさしさ、思いやりを、子どもたちがもっているそれぞれの能力を伝え合い、支え合う保育実践のなかで育み、伸ばしていきたいです。

そのためにも保育職員の処遇改善は、待ったなしの課題です。たいへんな状況下でも職員は父母や子どもたちの笑顔に励まされ、共に生きがい・やりがいを感じたり、悩んだりしつつ、日々の課題にとりくんでいます。保育士不足や賃金格差、こうした状況の根っこになにかがあるのか、私たち保育の現場から、保育士の配置基準の見直しや公的価格の引き上げによる処遇改善を引き続き発信し、運動の輪を広げることが重要になっていきます。

憲法に脈々と生きている「権利としての社会保障」を実現できる社会をめざして、あきらめずに一歩ずつ前進したいと思います。